

川崎市文化協会会長賞受賞作品

「いつまで押せるかな」

梶ヶ谷小学校 6年生 丸山 百花

とにかく坂が多い。でもそれに負けずに緑がたくさんあり、自然に囲まれている。私の住んでいる川崎市の梶ヶ谷の特徴です。

私の祖父母は三年前から健康のためと言って、雨の日以外は毎日二時間近く散歩をしています。散歩帰りに私の家に寄り、きれいなお花がさいていたとか、今日は神社でお願い事をしてきたとか教えてくれます。たまに私も誘われたけれど、散歩に行くより携帯をいじっている方が好きなので一緒に行くことはありませんでした。

ある日、祖母が転んで左足を骨折してしまいました。好きな散歩はもちろん行けません。祖父はけがをした訳ではないのに一人では散歩に行かなくなってしまい、いつも散歩帰りに色々な話をして楽しそうだった祖父母の顔が暗くなってしまったように感じました。そんな時、祖母から、「たまには、じいじとお散歩行ってあげて」とお願いをされました。祖父の事も元気づけたいと思っていたので私から誘ってみると、うれしそうにうなずいてくれました。いつもの散歩コースを私に案内しながら歩いてくれましたが、やっぱり梶ヶ谷はとても坂が多く疲れてしまったので坂をダッシュで登ってみました。すると祖父は、「百花はスゴいなあ、じいじは疲れたよ」と言ったので、坂の下に戻って背中を押して坂を登ってあげたら喜んでくれました。家に帰ってから祖父は祖母に自まんするように、坂で私に背中を押してもらったことを話していました。その姿を見ていたら何だか心がくすぐったくなってきたけど、それからは行ける時には祖父と散歩をして、祖母に色々な話をしました。すごく可愛い犬に会ったとか、桜が満開になっていたよと話をすると笑顔で祖母は聞いてくれました。

祖母が骨折してから二ヶ月経ち、やっと散歩が出来るようになり、初めて三人で散歩に行きました。ゆっくりとしたペースで笑って楽しく散歩をしました。祖父を押してあげた坂に来た時、私は二人を横に並ばせ、両方の手で力をこめてゆっくり背中を押しました。二人とも笑い合って、「楽だね、ずっとこうしてもらいたいよ」と言ってくれました。それを聞いて、祖父母が二人とも元気で散歩に行ける限り、坂を登る時は背中を押してあげたいと思いました。自然がいっぱいの川崎のこの町で、いつまで押してあげられるか分からないけど、この先ずっと背中を押してあげると心に決めました。